

# 令和元年度農作物病害虫発生予察情報

## 発生予報 第5号（8月予報）

発表日：令和元年7月25日

岩手県病害虫防除所

### I 情報の要点

#### 1 水 稲

- ◎**いもち病（穂いもち）の発生は並の予報**ですが、基本防除を徹底するとともに、葉いもちの発生状況と気象経過に注意し、必要に応じて追加防除を実施しましょう。
- ◎**斑点米カメムシ類の発生はやや多の予報**です。水稻の生育に合わせて、穂揃期1週間後の基本防除を徹底しましょう。また、本田内にイヌホタルイが多発している圃場では、追加防除を実施しましょう。

#### 2 りんご

- ◎**褐斑病の発生が多の予報**です。本年は既に発生しているもので、園地内を注意して観察し、発生が見られた場合には速やかに特別散布を行いましょ（7月25日発表の注意報第3号を参照のこと）。
- ◎**ハダニ類の発生はやや多の予報**です。夏期は増殖が早いので、防除適期を逃さないよう注意しましょう。
- ◎**果樹カメムシ類の発生がやや多の予報**です。園地への飛来状況に注意し、大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を実施しましょう。

#### 3 野菜・花き

- ◎**きゅうりでは、炭疽病の発生がやや多の予報**です。発病を確認した場合は、発病葉を摘み取り処分するとともに、本病にも効果がある薬剤を選択しましょう。
- ◎**キャベツでは、コナガの発生が並の予報**ですが、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施しましょう。
- ◎**ねぎでは、べと病の発生が多の予報**です。本年は既に発生しているもので、効果の高い薬剤で速やかに防除を行いましょ（7月25日発表の注意報第4号を参照のこと）。  
また、**ネギアザミウマ、ネギハモグリバエの発生がやや多の予報**です。効果の高い薬剤による定期的な防除を行い、密度低下を図りましょ。
- ◎**りんどうでは、花腐菌核病の発生がやや多の予報**です。防除開始時期は気象条件により変動するので、今後発行する情報に注意しましょ。

### II 農薬の安全・適正使用

- 1 岩手県では、6月1日から8月31日までを農薬危害防止運動期間と定め、農薬の使用や販売に関する正しい知識の普及・啓発をはじめとする各種の取り組みを実施しています。
- 2 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょ。特に、養蜂活動が行われている地域で水稻、大豆、りんごなどの作物に一斉に農薬を散布する場合は、養蜂家等への防除計画の事前周知に努めるなど、ミツバチへの危害防止に努めましょ。

#### 【利用上の注意】

#### ☆農薬危害防止運動実施中（6/1～8/31）☆

本資料に掲載した農薬は、令和元年7月24日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょ。
- ・農薬使用の際には、(1)使用基準の遵守(2)飛散防止(3)防除実績の記帳 を徹底しましょ。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆病害虫防除に関する情報は、いわてアグリベンチャーネット  
(<https://i-agri.net/Index/gate003>)からご覧いただけます。

### Ⅲ 3か月予報（仙台湾管区气象台、7月24日発表）

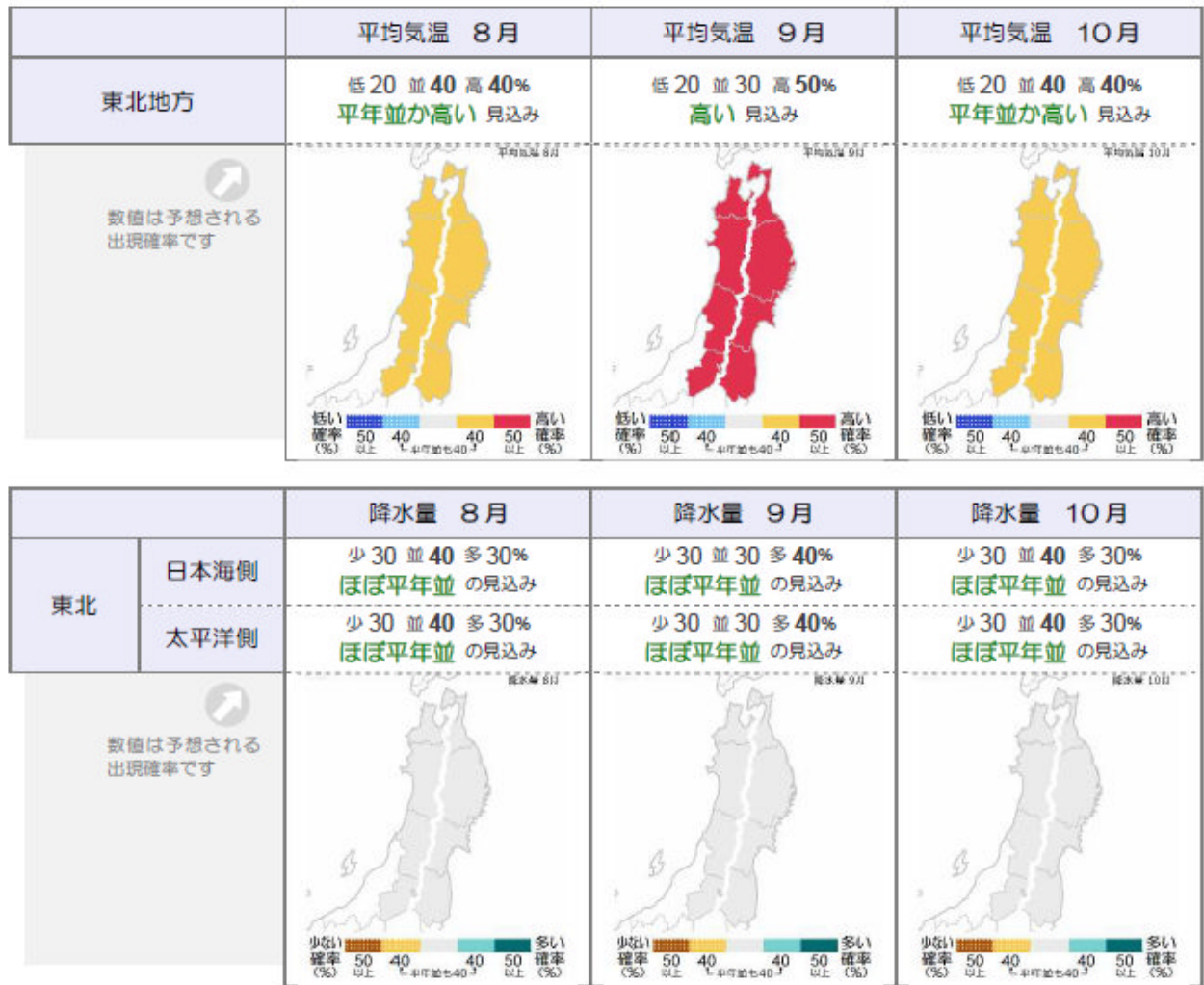
向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並でしょう。

9月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の見込みです。

10月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並でしょう。

#### 月別の平均気温・降水量



図は仙台湾管区气象台ウェブサイト (<http://www.jma-net.go.jp/sendai/>) より引用

## 水稻病害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
いもち病 (穂いもち)	並	並	(1) 水稻の出穂期は、ほぼ平年並となる見込み。 (2) 7月下旬の葉いもちの発生圃場率は、平年より低かった。(－) (3) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
紋枯病	－	並	(1) 7月下旬の紋枯病の発生圃場率は、平年より低かった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【いもち病（穂いもち）】

○イネの葉色が濃く、今後も寡照の予報であるため、出穂直前まで感受性は高く推移すると推定される。

○穂いもちの伝染源となる上位葉での葉いもち発生を防止するため、防除を徹底する（7月23日発表 病害虫防除速報 No.8 水稻編—4 を参照すること）。

- (1) 穂いもち防除は、**予防粒剤の施用**、または**出穂期と穂揃期の2回の茎葉散布**を基本とする。
- (2) 穂いもちの多発生が予想される場合は、以下の防除を行う。
  - ア 出穂後に降雨が続いたり、低温等で出穂期間が長引く場合は、出穂直前から、穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施する。
  - イ 上位葉での葉いもち多発時には、確認時から防除開始とし、穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施する。
  - ウ 薬剤の選択にあたっては、以下の予防・治療効果のある薬剤を用いる。  
フジワン剤、ブラシン剤、ノンプラス剤、ダブルカット剤、トライフロアブル

#### 【紋枯病】

○紋枯病は圃場を良く観察し、要防除水準に達している場合は、防除を実施しましょう。

- (1) 要防除水準は、穂ばらみ末期の発病株率が早生～中生種で15%、晩生種で20%以上である。
- (2) 要防除水準に達している場合は、出穂7日前～出穂直前に茎葉散布を実施する。その際、薬剤は株元に十分散布する。

#### 【ごま葉枯病（穂枯れ）】

- (1) 葉での発生が多い圃場では、出穂直前および穂揃期の茎葉散布で穂いもちとの同時防除を行う。

## 水稲虫害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点米 カメムシ類 (カスミカメムシ類)	加害時期 並	やや多	(1) 水稲の出穂期は、ほぼ平年並となる見込み。 (2) 7月下旬の畦畔におけるすくい取り調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (3) 増殖源となる本田内のイヌホタルイの発生圃場率は平年より高かった。(+) (4) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	—	やや少	(1) 7月下旬の本田調査では、発生圃場率は平年より低かった。(—) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
ウンカ類	—	並 (平年少発生)	(1) 7月下旬の本田調査では、発生は確認されていない。(—) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
ツマグロ ヨコバイ	—	並 (平年少発生)	(1) 7月下旬の本田調査では、発生は確認されていない。(—) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【斑点米カメムシ類】

病害虫防除速報 No.9 水稲編—5（7月25日発表）を参考に、水稲の穂揃期1週間後の防除を徹底する。

- (1) 薬剤による防除は、転作牧草地や雑草地に隣接したところを中心に行い、カメムシ類の生息する畦畔にも散布する。
- (2) 粉剤、液剤による薬剤防除適期は、水稲の穂揃期1週間後である。ただし、以下のような場合は、斑点米カメムシ類の発生が多くなるので、穂揃期1週間後および穂揃期2週間後の2回防除を実施する。なお、穂揃期1週間後にアルバリン剤、スタークル剤を使用した場合、2回目の防除は穂揃期3週間後に実施する。  
ア 水田付近に出穂開花中のイネ科植物（特にイタリアンライグラス）を含んだ牧草地等がある場合。  
イ 本田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイなどが多発している場合。  
ウ 例年、割れ粃が多い圃場の場合。
- (3) 地域一斉に防除すると効果が高い。地域の穂揃期の幅が7日以内の場合、半数の圃場が穂揃期に達した時期の約7日後に一斉防除を実施する。
- (4) 地域内で出穂の早い品種がある場合は、その圃場に被害が集中することがあるので注意する。
- (5) 水稲出穂期以降に畦畔の草刈りを行う場合は、穂揃期1週間後の薬剤散布後おおむね1週間以内（残効期間内）に行う。

#### 【フタオビコヤガ（イネアオムシ）】

- (1) 一般には防除は不要である。

#### 【ウンカ類、ツマグロヨコバイ】

- (1) 一般には防除は不要である。

### 3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家等への防除計画の事前周知に努めるなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。
- (2) 薬剤散布の際は、農薬使用基準を遵守し、周辺への飛散防止に努める。

# 大 豆

## 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
紫斑病	—	やや少	(1) 前年の発生量は、平年より少なかった。(—) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
マメシクイガ	—	やや少	(1) 前年の発生量は、平年より少なかった。(—)
吸実性カメムシ類	—	並	(1) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+):多発要因、(±):並発要因、(-):少発要因、(- -):重要な少発要因

## 2 防除のポイント（各病害虫のおおよその防除適期は下図を参照のこと）

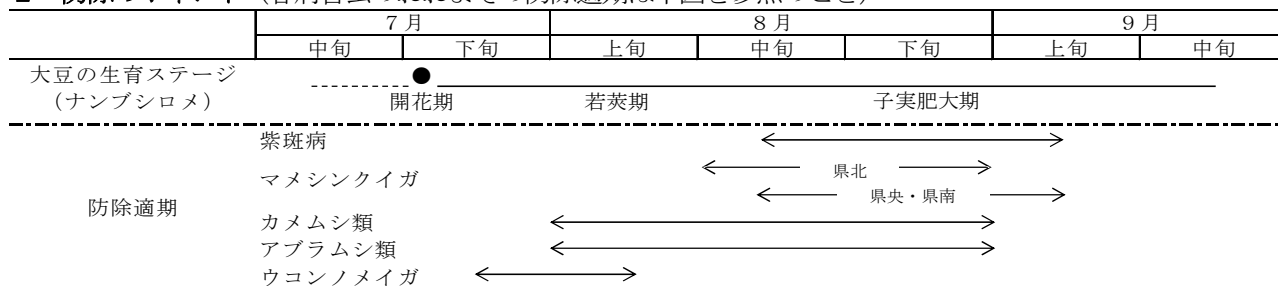


図 大豆病害虫の防除適期（平年の場合）

### 【紫斑病】

- (1) 若莢期（開花後20日頃）～子実肥大期（開花後40日頃）に1～2回、薬剤防除を実施する。
- (2) マメシクイガと同時に防除を行う場合は、マメシクイガの防除時期に合わせる。

### 【マメシクイガ】

- (1) 薬剤によって最も効果の得られる防除時期は異なるので、表1を参照する。なお、吸実性カメムシ類と同時に防除を行う場合には、有機リン剤か合成ピレストイド剤を選択する。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。

表1 マメシクイガの防除時期

薬剤	防除時期	
	県北	県央・県南
有機リン剤	8月第6半旬	9月第1半旬
合成ピレスロイド剤	8月第5半旬	8月第6半旬
ジアミド剤	8月第3～5半旬	8月第4～6半旬

### 【吸実性カメムシ類】

- (1) 開花後期～子実肥大中期に1～2回、薬剤防除を実施する。

### 【アブラムシ類】

- (1) 多発すると早期落葉や、ウイルス病媒介による褐斑粒が発生する恐れがある。したがって圃場をよく観察し、増加傾向が認められたら防除を行う。この際、薬剤が葉裏にも十分付着するように注意する。

### 【ウコンノメイガ】

- (1) 生育量が大きい過繁茂圃場や、葉色の濃い圃場において多発する傾向にある。
- (2) 7月第6半旬に茎当たり葉巻数が3個以上確認された場合は、8月5日頃までに薬剤防除を実施する。
- (3) 終齢幼虫には薬剤の防除効果が低下するため、防除時期が遅れないように注意する。

## 3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。
- (2) QoI殺菌剤及びDMI殺菌剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、連用を避け、2～3年に1回の使用にとどめること。

## りんご病害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点落葉病	—	やや多	(1) 7月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
黒星病	—	やや多	(1) 7月後半の巡回調査では、発生園地率は平年より高かった。(+) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
褐斑病	—	多	(1) 7月後半の巡回調査では、発生園地率は平年より高かった。(++) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【褐斑病】

「令和元年度病害虫発生予察情報注意報第3号（令和元年7月25日発表）」を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 本病の発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を特別散布する。
- (2) 前年多発園（前年秋期に黄変落葉が目立った園地）で、本年、これまでに本病を対象とした特別散布を実施していない園地では、発生の有無にかかわらず、速やかに特別散布する。
- (3) 定期的に園地をよく観察する。黄変葉や褐色の病斑葉が確認されたら、付近の葉を含めて観察する。本病であれば、病斑や病斑付近の緑色の部分に黒色虫糞状の粒々（分生子層）が必ず観察される（図1）。



図1 褐斑病の病斑（黒色虫糞状の粒々が特徴）

#### 【斑点落葉病】

- (1) 梅雨明け後の盛夏期には一時病勢は停滞するが、8月後半から9月にかけて再び急増する傾向があるので、発生状況に注意する。
- (2) 樹上部の徒長枝に多発している場合は、重要な伝染源となるので早めに除去する。

#### 【炭疽病、輪紋病】

- (1) 炭疽病の発病果は、2次伝染源となるので樹上に放置せず、見つけ次第摘み取りすみやかに処分する。
- (2) 輪紋病は8月下旬まで高温多雨条件が続くと感染頻度が高くなるので、防除間隔が空き過ぎないように注意する。

### 【黒星病】

- (1) 園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉（図2）や発病果（図3）を摘み取り、土中に埋めるなど適正に処分する。
- (2) 苗木など未結果樹での発生にも注意し、成木と同様に薬剤防除を徹底する。
- (3) 他病害との同時防除を兼ねて、本病に効果のある予防剤を定期的に散布する。
- (4) 散布ムラがないように十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布を行う。
- (5) 落花10日後以降のE B I剤の散布は、耐性菌が発現する恐れがあるので行わない。



図2 黒星病の病斑（病斑部は古くなると隆起する）



図3 黒星病の果実病斑

### 3 防除上の留意事項

- (1) 早生品種の収穫時期となるため、農薬を散布する際には、使用時期（収穫前日数）などの使用基準を遵守するとともに、散布対象以外の品種に飛散しないように十分注意する。

## りんご虫害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	—	やや多	(1) 7月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
ナミハダニ	—	やや多	(1) 7月後半の巡回調査での発生園地率は、目通りでは平年よりやや低く、樹上部では平年並だった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
キンモンホソガ	第3世代羽化 やや早	やや少	(1) 有効積算温度から推測される第3世代の羽化盛期は、平年よりやや早い。 (2) 8月の気温は平年並か高い予報。 (3) 7月後半の巡回調査では、第2世代の発生園地率は平年よりやや低かった。(—)
シンクイムシ類	—	並	(1) 7月後半の巡回調査では、被害果は確認されなかった。(±)
果樹カメムシ類	—	やや多	(1) 7月後半の巡回調査での被害果の発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 予察灯および集合フェロモントラップへの誘殺数は平年並から少ない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【ハダニ類】

- (1) ハダニ類の要防除水準は寄生葉率30%である。わい性樹では主幹近くの新梢葉、普通樹では主幹・主枝の徒長枝の下位葉を良く観察する。なお、目通りでの発生が少なくても、樹上部で多発している場合があるので、樹上部の徒長枝葉も観察し、要防除水準に達した場合は直ちに防除を実施する。
- (2) 夏期はハダニ類の増殖が速いので、防除適期を逃がさないよう注意すること。
- (3) 薬剤散布は樹上部までかかるよう十分量を丁寧におこなう。不要な徒長枝は散布ムラの原因となるので、早めに剪除し薬剤のかかりやすい樹形を維持する。
- (4) 薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は1シーズン1回の使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを遵守する。

#### 【キンモンホソガ】

- (1) 8月下旬以降の発生は実害がないので、第4世代を対象とした防除は一般的に不要である。

#### 【シンクイムシ類】

- (1) 被害果は見つけ次第摘果し、3日以上水漬け処分する。
- (2) 交信攪乱剤設置園では、フェロモントラップへの誘殺や被害果が確認された場合には薬剤防除を実施する。特に放任園が近くにある場合は発生源になるので注意する。
- (3) 近年、9月以降にスモモヒメシンクイによる被害果が散見されるので、昨年被害が多かった園地では、散布間隔を空けすぎないように留意し、9月上旬まで防除を行う。

#### 【果樹カメムシ類】

- (1) 大量の飛来が確認された場合は、効果の高い合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤などの薬剤により速やかに防除を行う。ただし、合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類の異常多発や薬剤抵抗性害虫の発現などが懸念されるので行わない。
- (2) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

### 3 防除上の留意事項

養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家への防除計画の事前周知に努めるなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。



## きゅうり

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	やや少	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
うどんこ病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
斑点細菌病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(－)
黒星病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(－)
褐斑病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
炭疽病	－	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
ワタアブラムシ	－	やや少	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【共通事項】

- (1) 8月はうどんこ病、褐斑病、炭疽病の重点防除時期なので予防散布を徹底する。特に、褐斑病、炭疽病は降雨が続くと急増するので、発生状況や天候に応じて薬剤を選択する。
- (2) 発病葉は随時摘み取り、圃場外に持ち出す。特に、アーチ上部の発病葉は下位葉への伝染源となるので、優先的に摘み取る。
- (3) 薬剤散布は、株全体の葉の表裏にかかるよう、アーチの両側から十分量をムラなく散布する。
- (4) 草勢が弱っている圃場では、特に適切な栽培管理（追肥、整枝、摘葉など）を行い、草勢を維持する。過繁茂は、薬剤の到達を妨げるだけでなく、病巣にもなるので注意する。

#### 【褐斑病、炭疽病】

- (1) 両病害とも発生を確認してからでは防除が難しく、特に褐斑病は急激に圃場内に蔓延する。現在発生が見られなくても予防散布に努める。
- (2) 発生が見られた場合には、発病葉を摘葉後、ジマンダイセン水和剤、ゲッター水和剤やダコニール1000、Q○I剤を選択し散布する。ただしQ○I剤は、耐性菌の発生リスクが高いので年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。

#### 【うどんこ病】

- (1) うどんこ病は、葉裏や茎、側枝で蔓延するので注意して観察し、発生が見られたら早期に防除を行う。
- (2) うどんこ病耐病性品種であっても、草勢が衰えると蔓延するので注意する。

#### 【べと病、斑点細菌病、黒星病】

- (1) 高温、乾燥時には発病が抑制されるが、気温が低下し降雨が予想される場合や8月後半以降は、本病にも効果がある薬剤を選択する。

### 【ワタアブラムシ】

(1) 発生が見られる場合は、引き続き防除を行う。

### 【ウリノメイガ】

(1) 例年発生が多く見られるのは、8月から9月にかけてであるが、幼虫もしくは葉が透ける食害痕や果実の表面をなめたような食害が見え始めたら、アフーム乳剤、コテツフロアブル等の効果のある薬剤で防除を行う。

(2) 若齢幼虫はヨトウガに似ているが、中齢幼虫では背面に白い2条の線があるので区別できる（写真参照）。



写真 ウリノメイガ(左:中齢幼虫、右:成虫)

### 3 防除上の留意事項

(1) 薬剤は、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、連用せずに異系統の薬剤をローテーション散布する。

(2) 銅水和剤（有機銅も含む）やモレスタン水和剤は、高温時に使用すると薬害が発生することがあるので注意する。

(3) 農薬の使用基準に基づき、有効成分毎の総使用回数には十分注意する。

# キャベツ

## 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
コナガ	—	並	(1) 7月の巡回調査では、産卵圃場率、程度とも平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
ヨトウガ	—	並 (夏眠 個体)	(1) 越冬世代の発生圃場率は、平年並であった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
ウワバ類	—	やや少	(1) 7月の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
モンシロ チョウ	—	やや多	(1) 7月の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

## 2 防除のポイント

### 【共通事項】

(1) 定植時に薬剤処理をした場合でも、被害が見られる圃場では、効果の高い剤を選択し防除を実施する。

### 【コナガ】

(1) 育苗期に寄生が見られた場合は、茎葉散布を確実に行う。

(2) 定植時に薬剤処理を実施した場合でも、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

(3) 薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。

ア コナガは飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガは本県に広く発生している可能性があるため、ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。

イ コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は1作型1回にとどめ、年間使用回数の削減に努める。

### 【ヨトウガ】

(1) 発育が進んだ幼虫は防除が困難となるため、圃場をよく観察し、卵塊やふ化幼虫が見られたらヨトウガに効果の高い薬剤を選択する。平年の防除時期は、県中南部平坦地では8月上～中旬、県北部と山間部では8月中～下旬である。

(2) 第1世代成虫の産卵期間は長く、1卵塊当たりの卵数も多いため、圃場の様子を観察しながら、発生が長引くときは追加防除を行う。

### 【モンシロチョウ・ウワバ類】

(1) 成長した幼虫は食害量が多くなるので、若齢幼虫が目立つ場合には直ちに薬剤防除を実施する。

## 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	-	多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(++) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
黒斑病・葉枯病	-	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 葉枯病菌が二次的に感染するべと病の発生圃場率が平年より高かった。(+) (3) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
さび病	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
ネギコガ	並	第4世代並	(1) 有効積算温度から推定される第3世代の羽化始期は平年並。 (2) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (3) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
ネギハモグリバエ	-	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

## 2 防除のポイント

## 【共通事項】

(1) 発生病害にあわせ、効果の高い薬剤でローテーション防除する。

## 【べと病】

「令和元年度病害虫発生予察情報注意報第4号（令和元年7月25日発表）」を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 本病に効果の高い薬剤（リドミルゴールドMZ、フェスティバルC水和剤、レーバスフロアブル）で速やかに防除を行うとともに、その後も定期的な防除を継続する。
- (2) 降雨が続くと発生が増加するので、薬剤散布は降雨前に行う。

## 【黒斑病・葉枯病】

- (1) 黒斑病：梅雨期等から発生が見られ、気温が低下する8月中旬頃から急増するため、予防散布や発病初期の防除に努める。
- (2) 葉枯病：べと病の病斑への感染が多発要因となるため、べと病にも効果のある薬剤を選択する。

## 【さび病】

(1) 気温が低下する8月後半以降、発病が多くなるため定期的な防除を継続する。

## 【ネギコガ】

- (1) 幼虫が葉肉内に侵入してからでは防除効果が劣るため、羽化時期から防除を実施する。
- (2) 有効積算温度から推定される第4世代の防除適期は、県中南部では平年並の8月第1半旬である。

## 【ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ】

- (1) 効果の高い薬剤による定期的な防除を行い、密度低下を図る。
- (2) ネギハモグリバエはネギアザミウマと同時防除が可能である。

## 3 防除上の留意事項

- (1) 圃場の土壌水分が高いと、べと病、黒斑病、軟腐病、白絹病等が発生しやすくなる。また肥料切れや肥料過多によって発生が助長されるため、適切な肥培管理に努める。
- (2) 収穫期が近い作型では、使用時期（収穫前日数）に特に注意して薬剤を選択する。
- (3) QoI 剤は、耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。

## りんどう

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
葉枯病	—	やや少	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(—) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
花腐菌核病	並～やや遅	やや多	(1) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。 (2) 前年秋期の発生量は平年より多かった。(＋)
ハダニ類	—	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率、程度とも平年より低かった。(—) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(＋)
アザミウマ類	—	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、早生品種で発生が見られ、発生圃場率、程度とも平年より低かった。(—) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【共通事項】

- (1) 花腐菌核病とアザミウマ類は収穫が終了した圃場が発生源となるので、収穫後の残った花茎は折り取り、圃場外に持ち出す。
- (2) 収穫が終了した品種でも防除を継続し、病害虫の発生源となるのを防ぐとともに、株養成に努める。

#### 【葉枯病】

- (1) 降雨後の薬剤散布は効果が劣るので、天気予報を参考にして、降雨前の予防散布を徹底する。

#### 【花腐菌核病】

- (1) 平年の防除開始時期は、県北部及び山間地域では8月第5～6半旬、県中部以南の平坦地では9月第1～2半旬である。しかし、防除開始時期は気象条件により変動するので、今後発行する情報に注意する。

#### 【褐斑病】

- (1) 8月は褐斑病の発生時期である。被害の拡大を防ぎ、翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。
- (2) 薬剤が到達しにくい下位葉や畦の内部、畦の北側など日当たりの悪い場所で発生が多く見られることから、薬剤が株全体に十分かかるように散布する。

#### 【ハダニ類】

- (1) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。なお、散布時は葉裏に薬剤が十分かかるようにする。
- (2) 雑草はハダニ類の発生源となるので除草し、圃場外へ運び出す。

#### 【リンドウホソハマキ】

- (1) 被害の見られる圃場ではリンドウホソハマキに効果のある薬剤を選択し、防除を継続する。
- (2) 圃場をよく観察し、被害茎や被害花蕾を見つけたら折り取り、圃場外で処分する。

#### 【アザミウマ類】

- (1) 花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖するので、花蕾が着色しはじめた頃から防除を実施する。